

## 第2回富士宮の学校力育成会議 会議録

1 日 時 平成20年9月8日(月) 18:30 から 20:30 まで

2 会 場 富士宮市役所 会議室 710

### 3 協議題

(1) 協議題 「富士宮の子どもたちの学力をどう培っていくか」

(2) 協議の視点

言語力の育成と活用する力

幼・保、小、中、高との接続と連携

地域をあげて - 参加・参画による家庭・地域との連携 -

### 4 参加者

No.	氏名	職業等
1	天笠 茂 氏	千葉大学教育学部教授、中央教育審議会委員
2	池谷 眞徳 氏	富士宮市立富士宮第一中学校 校長
3	伊藤 世津子 氏	富士宮市立貴船小学校 校長
4	大塚 清美 氏	図書館協議会副会長、「富士宮子どもと読書の会」代表
5	加茂 哲三 氏	司法書士、民事調停委員
6	小上馬 俊夫 氏	二の宮区 区長
7	鈴木 まき子 氏	静岡県立富岳館高等学校 校長
8	南里 昌彦 氏	富士宮市PTA連合会研修委員長
9	増田 恭子 氏	富士宮商工会議所 副会頭、 富士宮市フードバレー推進協議会 会長
10	望月 勝 氏	黒田幼稚園 園長

(50音順)

### 5 配布資料等

(1) 会議次第

(2) 資料

- ・ 学力を考える
- ・ 静岡県の子どもたちはどうだったの？
- ・ 富士宮の子どもたちはどうだったの？
- ・ 富士宮の子どもたちはどうだったの？
- ・ 学力・学習状況調査における無答率  
小学校国語B問題、小学校数学B問題、中学校国語B問題、中学校数学B問題
- ・ 平成20年度富士宮の学力にかかわる施策として取り組んでいること

## 6 会議

### (1) 開会

### (2) 教育長あいさつ

- ・第1回では貴重な意見をいただいた。
- ・生きる力に向けての学力をどう付けるか等、それぞれの立場での意見を、より踏み込んでいただければありがたい。
- ・今日の話し合いを元に、第3回には具体的な話し合いをしていく。
- ・講演会では、時宜を得た分かりやすい話、育成会議に向けてのヒントになる話をしていただいた。
- ・新学習指導要領については、年間時数が先にありきではなく、哲学を踏まえた魅力ある学校づくり、ダイナミックな学校づくりをしていってほしい。この会議の協議が反映されることを願っている。

### (3) 第2回富士宮の学校力育成会議の協議テーマ及びテーマ設定の経緯（若林課長）

#### 3つの柱について

##### 言語力の育成

幼・小・中・高などの学校間の接続、連携

地域と学校との連携、協力

協議テーマ「富士宮の子どもたちの学力をどう培っていくか」

#### 視点

言語力の育成と活用する力

幼・保、小、中、高との接続と連携

地域をあげて 「参加・参画による家庭・地域との連携」

### (4) 協議資料についての説明（中野係長）

### (5) 協議

#### (天笠)

- ・～ について順を追って話し合いを進めていく。(前後、重なりはある)
- ・質問事項の確認
- ・富士宮市の課題も明記され、興味深いデータであるがどんな感想を持ったか。

#### (伊藤)

- ・小学校における算数の課題についてはショックを受けた。
- ・1時間の学習過程について思い浮かべてもらいたい。
- ・問題 課題 一人学び 練り合い 振り返り(まとめ)
- ・1つの問題から一般化するまで、1時間の授業の問題数、家庭学習へのつなげ方など課題を解決するような手だてについて検討していく必要がある。

#### (南里)

- ・以前からこのような傾向があったのか。

#### (中野)

- ・直感的に思っていたことをはっきりさせるためのこの調査があった。
- ・今回の学力・学習状況調査は、OECDのPIISA調査とも比較する目的もあった。
- ・過去と比較するだけの資料は、現段階ではない。

#### (天笠)

- ・方策を考えてほしいが、最初から出てくるわけではない。
- ・データの読み取りがあって、改めて富士宮市のおかれている状況も、身近な子どもたちと重ね合わせながら考えていってほしい。

#### (大塚)

- ・学習意欲についてのものさしがよくわからない。無答率のみで意欲がはかれるものなのか。

#### (中野)

- ・1つの手がかりであり、「勉強が好きか」や観察などからも分かると思う。

(天笠)

- ・県リーフレット「読書が好きか」の中にも意欲が表れているが、問題に向かおうとするところに目を向けて、無答率を比較したのではないか。

(鈴木)

- ・中学校の正答率を3年間だけで上げられるわけではない。
- ・小学校の土台作りができていると見ることもできるのではないか。

(天笠)

- ・1つの意見として

(望月)

- ・子どもたちの生活の中に環境設定がされている。
- ・今、算数や理科に環境設定がされているのか。また、今後設定されていく予定はあるのか。
- ・読書はできているが、算数、理科については疑問が残る。学校の生活の中で位置づけられていく必要がある。

(天笠)

- ・それぞれの委員が、見解を述べ始めているので、一つのテーマについて30分。
- ・具体的な案にまで及ぶならそれに越したことはない。
- ・資料についての質問も加えて結構である。
- ・特徴的な表れとして目を引かざるを得ないが、富士宮の皆さんから見るとどうであるか。

(加茂)

- ・富士宮の小・中学生に関して、自分が感じ思うところでは、自分の考えを持って、発言や議論することを得意とする生徒はそんなに多くはないと思います。
- ・学校内や地域社会などとの交わりの中で、それぞれの事象やニュースについて話し合い・議論することによって言語力が活かされ・養われて行くと思うので、その視点を重視したら如何と思う。
- ・学校生活の中で言語力の向上のためのテーマや課題を取り上げる方法を話し合う必要がある。
- ・自分の考えを持って、他人と議論やディベートをする場を作ることが、言語力が高まり、考える力が養われ、算数などの応用問題の解決能力向上に繋がっていくのではないか。

(天笠)

- ・Aならば対策は簡単。Bというのが難解であり、ポイントとなってくる。
- ・Aは積み重ねにより、比較的短期間に表れる要素をもっているが、各校が1年かけて取り組んでも、また来年同じような傾向が表れる可能性をもっている。
- ・全国的にも同じような傾向をもっている。

(加茂)

- ・Aの計算力を高めることは、集中力を高めることに繋がるとの意見もあり、大切。
- ・計算力が高まりスムーズに計算ができれば、応用の問題にも集中力を高めて臨むことができる。

(小上馬)

- ・無答率など、数的に見て判断することがよいのか。
- ・学校や子どものもっている中身の一つ一つを見ていくことが大切。
- ・無答率は時間不足からイメージして構成する力の弱さや発達段階、進度に照らすなど、もっと理由を丁寧に見取っていく必要がある。
- ・数的に判断するのは怖い。

(伊藤)

- ・平均値等数の向こうに何が見えるかは大切なことであるので、分析をしながら自校の学習指導と重ねて合わせていく必要がある。
- ・根拠をもって問いを解く力、言語力を駆使しながら、問題に立ち向かおうとしていく構えをはぐくみたい。

(大塚)

- ・活用力をどう教科の中で高めていくか。
- ・書く力、読む力、表現する力が、数学、理科、社会にも必要になってくる。
- ・説明、書くなどの具体的な場面で、言葉を取り込んでなければ出てこない。

- ・言葉を取り込む機会が、今の子どもには少ないのではないか。
  - ・親しい人とかかわりの中で、具体的な言葉を取り込む等、一次的な言葉、二次的な言葉など発達の段階で取り込めていないのに、さあ書きなさいと言われても、抵抗をもっているのではないか。
  - ・不足しているばかりに、影響してくるものは他にもある。
- (天笠)
- ・言葉の力をつけていく必要がある。
  - ・そのためには
    - 授業を中心にしたやりとり
    - 家庭におけるやりとり
    - 地域社会におけるやりとり
- が大切であるが、その相互関係が乏しくなっているのに、「さあ、書きなさい。」と言われても、子どもたちには抵抗があるというのが課題である。
- (大塚)
- ・もっと日常的なかかわりの中で、子どもの言語力を育てていかないとそれぞれの教科での活用力は伸ばせない。
- (天笠)
- ・お店でも、家庭、地域でも、日常的な言葉のやりとりの場をどうつくっていくか。
- (池谷)
- ・「国語力向上プロジェクト」の研究指定を受け、表現力を高めることに取り組んでいる。
  - ・結果についてどうしてなのか分析する必要がある。
  - ・言語力の育成についてそれぞれの学校が取り組み、その成果を次年度に持ち越せば、具体的につながる。
- (天笠)
- ・通常は、小学校はよいが、中学校は悪い。
  - ・富士宮市で示されていることがどういう要因からなのか、しっかり押さえ、理解しておくことが大切。
  - ・学校の授業の在り方とは別に、Bは家庭や地域の問題も大きくかかわっていることである。
  - ・学校を支えていく基盤をしっかりしていくことがテーマとして出てきた。
- (増田)
- ・声かけをするとき、学校で教わったことは表には出ないが、自分の意図が言語になって明らかにする助けとなる。
  - ・声にならない声を、声にする言語力が必要。
  - ・子どもたちが発表したいことを、市の中で発表する場を提供している。
  - ・手を取り心をふれあう。
  - ・話すことによって自信を付けられる。
  - ・話すことではなく、認められることが言語力の原動力となる。
  - ・生きる力を養うためには、生きようとする力が大切。
- (加茂)
- ・学校は、地域社会の構成員の一員であり、地域社会における大きな企業であると捉え、学校を経営するという感覚が必要である。
  - ・生徒は、大事な社員であり、価値創造をあげるお客様であり、校長先生を始め先生方は、経営者、理事者と考え、地域住民・保護者は重要な取引先のお客様であると考えます。
  - ・言語力の育成という言葉について、生きた言語力、を育成するには、学校内における言語の利・活用をするだけではなく、地域社会の構成員たる有能な人材を活用することも考える必要がある。
  - ・井之頭の中学生金融体験プログラムは、正に活用でありすばらしいところがある。
  - ・自信と誇りを持って不易と流行の基本的スタンスをもって進めて、積み上げていく必要がある。
- (池谷)
- ・学校代表の子ども達が集まって、学習への取り組みについて話し合いて、学習宣言をするのはどうか。意欲が高まるのでは。

(小上馬)

- ・子どもが育つ過程は、個人差が大きい。
- ・少ない時間でやると、個人差が絡んでいるので難しい。
- ・個人としては表現できるが、議論の力はどうか。
- ・場の設定、司会の輪番制、子どもの意志を聞き取り広げていく大切さ。
- ・課題解決の力が中学校の結果に生きている。

(天笠)

- ・1つめの視点に移りたい。
- ・これまで「言語力の育成が鍵を握っている」が、クローズアップされてきた。
- ・説明する授業が新学習指導要領に明記され、全国的な課題でもある。
- ・言語力の充実、体験活動の充実は、一緒のものとして捉えていく必要がある。
- ・どのように組み立てていくか、学校と地域が一体となるために、地域の学校の支え方、学校の進め方の意見がほしい。

(南里)

- ・授業参観の目的をもとにした説明(プリント)を準備してあれば、家に帰ってからの子どもとのコミュニケーションがとれ、言語力を育てるサポートができるのではないかな。

(天笠)

- ・「学力とコミュニケーションは、これからどう考えていけばよいか」が重要なテーマになっていく。

(南里)

- ・子どもの状況を把握していれば、担任との、または夫婦間での共通のコミュニケーションがとれるようになる。

(天笠)

- ・コミュニケーションをとる力自体が学力であるという考え方が、どれだけ受け取られてきたか。
- ・学力の中身として考えなければいけないというのも、今日のテーマの1つ。
- ・家庭、学校、地域のコミュニケーションをどのようにとっていけばよいか。

(望月)

- ・20代から30代のお母さん方の1割の手紙の内容に目を通して感じる事。
- ・誤字脱字は少ないが、何を言いたいのか分からないものも多い。
- ・長期休業中に担任が、家庭に電話をすると、端的な話ができない。
- ・言語力は子どもだけではどうにもならない。
- ・来年から人間関係が強調されている。
- ・授業だけでなく、地域や親を含めて取り組む必要がある。

(池谷)

- ・家庭学習や読書のやり方、学習時間などについての手引き書があると学力の向上につながるのではないかな。
- ・学校だけでなく、家庭とも協力してやっていったらどうか。

(加茂)

- ・ちょっとしたヒントを与えることによって、理解力を高めることがある。
- ・そのようなヒントなど、積み上げたものを公開しながら、先生、保護者、地域にも公開してくれるのもよいのではないかな。
- ・学力調査の結果を公開してもよいのではないかな。
- ・公開してみんなでき取り組むことが必要ではないかな。

(天笠)

- ・家庭での様々なことがどの程度共有できているのか。富士宮ではどうか。
- ・家庭における学習の時間の確保も1つの提言としたらどうか。
- ・どのようにしたら家庭において確保できるのか。
- ・地域性など含めて何を打ち出していけるか。

(伊藤)

- ・家庭学習の在り方は気になるところの一つである。
- ・家では、早起き、朝ご飯は浸透しているのではないかな。(富士宮の子どもの状況より)

- ・家庭学習 量的、内容を提示しながら、基本的な生活習慣とあわせて学習習慣の確立を家庭と連携して図れたらと思う。
- ・きまり、約束をしっかり身に付けていくことにより学力が伸びていくことがデータからも伺われるので規範意識も視野に入れて提言ができれば。

(鈴木)

- ・学力はトータルで考えていかななくてはいけない。
- ・幼から高のどこの段階でどれだけの力をつけていくかというおさえ。
- ・学力の土台となることは何なのかをトータルで考えていかなければならない。
- ・小、中の違いが出てくる要因は何なのか、ずっと気になっている。
- ・富士宮の子どもの読書量は結構ある。
- ・小学校の部分でも悲観的になりたくない。もっと、自信と誇りを持ちたい。
- ・国際的に通用する力をつけていくには、学校でどういう教育をしなければならぬかを考えていく必要がある。
- ・学校、家庭、地域の中で何をおさえしていくか確認したい。

(天笠)

- ・学校からするとどういうことを応援してほしいか。

(鈴木)

- ・基本的な生活習慣、コミュニケーション(自己表現できる力)、自分であることを確認する場、地域において存在しているか。

(天笠)

- ・地域において自己表現できる場はあるのか。

(池谷)

- ・地域生徒会の開催(三中の例)
- ・地域の敬老会への児童の参加(西小)
- ・避難訓練の参加(一中)

(天笠)

- ・一般的に崩壊されていると言われているが、富士宮の地域性に合わせて何か提言していくことはあるか。
- ・例えば、宿泊合宿(通学区合宿)なども一つの方法か。

(小上馬)

- ・地域の受け皿に地域差がある。
- ・学校に依存する量を減らして、地域がより関わるようにしたい。
- ・防災訓練への参加の仕方が、生き生きとしていないのは、地域の持っている力の弱さ。
- ・地域ができることを地域ができているか。

(天笠)

- ・地域がどうかかわっていくか、もう一歩踏み込んだ関係をつくってもらえるかどうか。

(加茂)

- ・学校が地域社会構成員の一員であるという認識で、校長先生をはじめ先生方が、学校内における職務だけでなく、地域の人達と交わる必要がある。
- ・学校の先生経験者や市の職員経験者の区長さんが、市内の区長の半数以上が該当することも合わせて、活用人材バンク名簿を作成し、地域力を生かす。

(天笠)

- ・3点目、学校間の接続、連携について意見をどうぞ。

(池谷)

- ・小1担任が苦勞することは、集まった子どもたちの生活習慣がバラバラであること。
- ・幼稚園同士、基本的な生活習慣について、共通の指導をしてくれれば連携が図れる。

(伊藤)

- ・園小連携市の研究指定をH19年より受け、園小連携を通して人間関係が高まる授業作りを目指している。
- ・サブテーマであるコミュニケーション力をどのように培っていくか。
- ・ある幼保全国アンケートで、幼稚園では先生や友だちの話が聞けるか心配あり、小学校ではル

- ・ールが守れるか心配という結果がでており、入門期における関心事にずれがある。
- ・小一プロブレムをどう解消していくか。
- ・人間関係をつくる力をどうつけていくか、コミュニケーション力に視点を置いて園小での接続を考えている。
- ・端緒についたばかりだが、園小で確認し合ったところである。
- ・「これだけは」という共通のものをつくっておくと、子どもの成長をしていく上での学びの姿につながる。
- ・保護者の不安解消につながる。

(望月)

- ・幼に小の教育課程がついてくることはなかった。これを機会にそれぞれの内容を知ることは大切。
- ・幼保連携協議会は、昔はあったが今はない。3小学校に自分の園児が1/3ずつ入学する。
- ・小学校の先生が、幼稚園の教育要領をどこまで理解しているか。
- ・文科省、学年を超えて分けた機会を使って子どもたちの交流だけでなく、先生方の交流研修も必要。
- ・5領域を総合的に取り組んでいく必要がある。

(小上馬)

- ・小学校6年生では、司会を見事にやっているが、中学校に入ると1からやり直すことがある。
- ・小中連携の中に、全体的に子どもたちのもっている力を確認するとロスが少なく連携ができるのではないかと。
- ・自立的、自治的活動の力の上に積み重ねていきたい。

(池谷)

- ・小学校では正しく読み取る力、中学校では自分の言葉で表現、小から中の接続を試みている。

(大塚)

- ・子ども一人一人が違うのは当たり前。一つにまとめることに奇異を感じた。
- ・テレビっ子が増えていることからくるコミュニケーション不足。
- ・子どもたちのために考えていきたい。

(天笠)

- ・何か一言提言できないか。

(大塚)

- ・脳に与える悪影響については本も出ている。
- ・市の「読書と読み聞かせ推進事業」の中で若いお母さんたちに伝えている。

(天笠)

- ・ノーテレビデー、ノーパソコンデーなど今の情報環境にいる中で、どう育てていきたいか考えていく必要がある。
- ・0歳から15歳までの子どもを、富士宮市はどう育てるか。一定の責任と自負心を持って、子どもたちを世の中に出せるか、そのためにどういう力を付けていくか。それが今日の場合は「言語力」であった。
- ・言語力をどうやってつけていくか、そのために地域と家庭がどうかかわっていくか。
- ・地域、家庭の存在があって、注文が多い時代の中で、一歩先に踏み込んでいくことに、それぞれの関係者の中に求められている。
- ・その具体的な方策を提言することが問われている。